

# 天文学と地球科学をつなぐゲーテ『親和力』の庭園表象

松井尚興

## 1. 景色に重なる身体と天体

ゲーテ『親和力』の主人公四人は英国流の風景庭園を造ろうとする。彼らの工事は、地水火風の四元素による人体小宇宙の生殖活動や大宇宙の自然現象を戯画化したものだと私は解している<sup>1</sup>。だが、作中の風景描写は多くの点で実在の風景を想わせもするので、ゲーテが特定の庭園を小説の原型にしたとみる論者も多かった<sup>2</sup>。私は庭園ではなく、彼の研究した自然の景観に注目したい。例えば彼は小説執筆中の1808年の湯治旅行の途上で、チェコの火山カマービュールの山容を素描したが<sup>3</sup>、その頂上に立つパヴィリオン Lusthäuschen や山腹に描かれた道路工事現場は、小説中のパヴィリオン Lusthaus (365)<sup>4</sup>が立つ丘の山腹の道路工事 (329) を容易に連想させる。また彼は、過去の火山活動のあり方や、「過去の山の湖」がその一帯の沼沢地の形成要因となった可能性について考察したが<sup>5</sup>、小説中でもオティーリエと大尉(私の解釈では〈火〉と〈水〉を体現する)が、それぞれパヴィリオンの敷地決定 (325f.) と、丘の麓の三つの沼を太古の「山の湖」のように再統一する計画 (335) に携わる。作中風景を人体に見立てるとき、その丘と沼は恥丘と子宮に比べられるが、作者のカマービュール登山には彼と恋仲になった女性が同行していたので<sup>6</sup>、めざす頂上のパヴィリオンは、作中の人体風景でも快楽 Lust の熱い核を象徴するものになったと考えられよう。

このように自然研究者ゲーテの眼差しを追う時、特に注目したいのは1801年夏の湯治旅行だ。彼は旅の途上で、解剖学標本や色彩論関係文献の分類目録を目当てにゲッティンゲン大学を訪れたが、その図書館は、建築家シェーデラー Schädeler が<sup>7</sup>、元は教会だった大学本館の内陣部分に繋がるように新設した脇の建物にあった<sup>7</sup>。それを、十字架(をかたどる教会)から垂

<sup>1</sup> 拙稿「『親和力』の光芒」本誌第4号、2010年、141-156頁、「『親和力』四元素の生理と物理」(左記拙稿への補遺と訂正)本誌第5号、2011年、165-168頁。

<sup>2</sup> 今までに挙げられた候補地は、いずれも広い支持を得ていない。Harald Tausch, „Das unsichtbare Labyrinth“, in Helmut Hühn (Hg.), *Goethes „Wahlverwandschaften“*, Berlin / New York 2010, 89-136. の98頁を参照。庭園の地図や模型作りも試みられたが、地理学的には明らかに不自然な地形ができてしまう。例えば Ernst-Gerhard Güse (Hg.), *„Eine unbeschreibliche, fast magische Anziehungskraft“. Goethes „Wahlverwandschaften“*, Weimar 2008, 33, 100f. を参照。

<sup>3</sup> *Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche*, 40 Bde., Frankfurt a.M. 1985-1999 (以下 FA と略記), I-25, 400, Abb. 22.

<sup>4</sup> 以下、FA I-8 所収の『親和力』からの引用については、本文中に参照頁数だけを記す。

<sup>5</sup> FA I-25, 400ff.

<sup>6</sup> Sylvie von Ziegessar (1785-1858) という女性。Ernst Grumach und Renate Grumach (Hg.), *Goethe: Begegnungen und Gespräche*, VI, Berlin / New York 1999, 502. (7月17日の日記)

<sup>7</sup> Alfred Oberdiek, *Göttinger Universitätsbauten*, Göttingen 2002. の6頁に図版がある。

れた頭蓋 Schädel に見立てて戯画化したのが、作中の教会の「脇礼拝堂」(400)であるらしく、その改装作業は同大学出身のトマス・ヤングの視覚研究を風刺するものとなった<sup>8</sup>。一方、旅の目的地ピュルモントの地誌は、(カマービュールと同様)作中の風景に直接取り込まれると同時に、呼吸・消化・生殖器官に類比される形で、作家の複数の恋の記憶と絡まりあう。その恋人達の誕生日は天文学史上の重要な日付と結びついて、主人公の誕生祝いや植物の開花など、物語の時間経過を構成してゆく。植物の根こぎや伐採は、天文観測に絡む欧州諸国の血みどろの覇権競争を、半ば神話的に表現していることがやがて判明するだろう。

## 2. 母胎に重なる湯治場の地誌

ピュルモントは当時有名な鉱泉町であり、『親和力』の化学談義に登場する炭酸水(304)にも「ピュルモント水」に近い効能が求められるほどだった。町名は〈石の山 Pier(r)emont〉に由来するとも言われていたが<sup>9</sup>、そこにはゲーテの恋人となるシャルロッテ・フォン・シュタイン(いわば〈石 Stein のシャルロッテ〉)が1770年代に何度も療養に来ていた。ゲーテも知る町の医者ツィーママンは彼女の「微風のような軽い足取り」を称賛していたが<sup>10</sup>、作中で〈空気〉を体現するシャルロッテも美しい足で男を魅する(349)<sup>11</sup>。作中の丘の建物の礎「石」の定礎式はシャルロッテの誕生日に行われ、その式典ではニュートン三法則を思わせる式辞や万有引力法則を暗示する物体の投擲が演じられるが(330ff.)、1742年生まれのシュタイン夫人は、(英国のユリウス暦で)1642年12月25日生まれのニュートンと誕生日が同じだった。作中の式典の情景描写も、二人の誕生日の冬景色と必ずしも矛盾しない。

さらに、夫人の産んだ三男四女のうち男児だけが乳児期を生き延びたこと(女兒は〈造り損なった〉こと)も、作中のシャルロッテの性癖を連想させる。彼女は窓の多い苔小屋(272)という肋骨的・肺胞的領域の造園に力をかけすぎだ、と大尉が見咎めて、腹部的領域の造園を先導してゆくからだ。骨ばった胸郭から腰のくびれを経て骨盤に至る造形の妙を、アダムの肋骨からイヴを作るという創世神話に重ねたかのように、大尉は言う。目立たぬ「岩角」を一つ欠きさえすれば、「美しく屈曲した登り道」ができる上に、「道が細く奇形になりそうな所に壁を作るための石材」を作れるのに、と(291)。シュタイン夫人が四女の死(1774年)後、ヴァイマルの主馬頭であった夫ヨジアスの子を宿さなくなったように、作中で批判されたシャルロッテも胸郭状の階段作りの反復をやめ(292)、馬の世話にかまける「男たち」(エドゥアルトや大尉)と疎遠になる(292f.)。〈土〉と〈水〉を体現するこの男たちはその後、「スイス風の秩序

<sup>8</sup> 礼拝堂の円天井は黒目(または眼窩)、色の薄い壁は網膜、柱とその装飾は血の通う脈絡膜、作業用足場と板は外眼筋と毛様体筋、床の凸凹は中心窩、オティリーエがつける「襪の多い衣装」(405)は水晶体が作る色収差と解せよう。前記拙稿(151頁以下)とその補遺(167頁)の解釈は不十分なので、詳細は近刊の拙訳『親和力』第二部の訳注を参照されたい。

<sup>9</sup> Karl Theodor Menke, *Pyrmont und seine Umgebungen*, Pyrmont 1818<sup>1</sup>, 45; 1840<sup>2</sup>, 46f.

<sup>10</sup> 原語は „leichten Zephyrgang“ (1774年12月12日付ラファター宛書簡)。ヨッヘン・クラウス『シャルロッテ・フォン・シュタイン』鳥影社、2006年、42頁(原書50頁)に引用。

<sup>11</sup> 前記拙稿149頁以下参照。

と清潔さ」をめざして、ベルン出身の解剖学者ハラーが図解したような「半円」状の腹膜的な壁で「村」を囲む相談をし、結「石」や寄生する「乞食」への対策を練ってから (315ff.)<sup>12</sup>、今度は (ハラー流の前成説とは異なって)「英国」式に自然な人体庭園の形成をめざして図面の利用法を工夫する (318)<sup>13</sup>。そのお陰で、シャルロッテの骨ばった形成衝動の「最初のイメージ」から「完全には切り離せなかった」もののその変形として、腹部にふさわしい「緩やかな登り道」と、その斜面の陰核的な建物 *Lustgebäude* が発案された (318)。ただそれは〈空気〉のためにならぬ横隔膜の下方の腹部の事業なので、シャルロッテはゲーテ動物学の「予算総額一定の法則」<sup>14</sup>に沿う形で工事予算の圧縮に努める (319; cf. 292)。

この胸部と腹部の区分はしかし〈プラトニック〉なものでもある。プラトンの『ティマイオス』によれば、胸が情熱の炎を冷ます場であるのに対し、腹は飢えを満たすための「秣桶」に等しい。神々は「女の住居と男の住居を分けるように」人間の胸と腹、欲望の上等な部分と下等な部分を横隔膜で仕切り、理性で上から支配しようとしたのだという<sup>15</sup>。これを想起するかのよう大尉は、もはや自分やエドゥアルト (水と土) ではなくオティーリエ (火) しかシャルロッテの胸郭の小屋へ招かれないという境遇を嘆く (318) 一方、領主エドゥアルトの城館については、「古人たちは理性をもって城館をここへ築いた。ここは風から守られ、日々の欲求にすぐ手が届く」と言う。そして、普段の食事とは違った「極めて快適な」社交のひと時を過ごしたければ、城館 *Schloss* の閉域 (括約筋 *Schließmuskel* で制御される) を出てあの丘の建物に行けばよいと言うのだ (326)。大尉が「石を砕くという名目で」丘の上下を繋ぐ道をほぼ完成させた、シャルロッテの誕生日間近のある夜に、エドゥアルトは骨身に「何か虚脱感を覚え」て、彼女と大尉に「最高の難曲の一つ」を合奏させた (329f.)。その難曲は、出産を重ねて軋む女体の恥骨のフーガ (恥骨結合部 *Schambeinfuge*) だったと考えれば、シュタイン夫人が耐えてきた苦難が察せられよう。大尉は骨盤に開かれた恥骨弓で「ヴァイオリン」を弾いたのではなかろうか。その彼が「石 *Steine* を砕く *brechen*」と言うとき、作家とシュタイン夫妻の関係に深い亀裂が走るようにもみえる。だがその直前の段落で、シャルロッテに会わず禁欲的に「早起き」して彼女に敬意を抱かせる大尉の姿は、若きゲーテのプラトニックな愛を象徴するものと解しうるし<sup>16</sup>、これに続く作中の定礎式で処女膜的に厳封される礎〈石〉の「蓋」(333)も、シュタイン夫人が婚姻の神 *Hymen* を冒瀆しなかったことを意味しうるだろう。

実は、ピュルモントには彼女の夫も何度か滞在している。頭痛に悩み晩年には発作で右腕麻

<sup>12</sup> 当時の医学書には、虫下し用の薬草や金属粉末の様々な内服・注腸法が記されている。大尉とエドゥアルトが乞食を施して驚かすために、「村」の両端にある「賄い付き宿屋」と「老いた良い住民」に「少額のカネ」を預ける (317) のは、消化管上端の胃や下端の〈盲〉腸と〈直〉腸に何分の一ドラクマかの金属を入れて虫を追いだそうという作戦だろう。

<sup>13</sup> ゲーテは、現状と完成予想図を対比して見せるという当時の庭園建築家の図面利用法に、動物と人間の姿を見比べる自分の比較解剖学研究との共通性を見ていたのだろう。

<sup>14</sup> 『骨学に基づく比較解剖学一般序説の第一草案』を参照 (FA I-24, 235)。

<sup>15</sup> 69e-70e. 古代ギリシアでは異例の、女性上位の区分を示すように読める一節である。

<sup>16</sup> 早漏に悩む詩人が性交ぬきの欲求充足を探求していた、などとする穿鑿的な研究 (クラウス、前掲書、136頁に引用) も、この文脈では意味をもつかも知れない。

痺を蒙っていた彼の脳には、若い頃落馬の際に剥離したらしい頭蓋骨の碎片で圧迫されていた形跡が死後発見された<sup>17</sup>。小説第2部第16章のエドゥアルトとオティーリエの出会いの情景は、この解剖所見を踏まえている可能性がある。そこには頭骨の磷酸石灰〈土〉と、偏頭痛で異常発（火）する視神経の位置関係が示されていると私は解釈していたが<sup>18</sup>、その直前に現れる〈水銀〉ミットラー（508）を圧力上昇の印と解するなら、より具体的に、シュタイン夫妻をそれぞれ苦しめた頭痛と偏頭痛<sup>19</sup>の病状がそこに読み込めるかも知れない。ただその場合、夫妻の疾患の部位と、オティーリエおよびエドゥアルトの左右の頬杖との対応関係をどう捉えるかが問われるが、本稿でそれを検討する余裕はない。

ピュルモントの地誌は作中に、こうした個人史をも暗示しつつ細かく織り込まれている。例えば中心街の菩提樹の並木のほか、環濠、防塁、菜園、花壇、温室や菩提樹の大木に囲まれたバロック様式の領主の城館がそのまま、作中の身重のシャルロットの身辺で話題に上る（453f., 459）。夏季にこの町に珍しい南国植物などを出品していた近隣のある城館は、農学者オットー・フォン・ミュンヒハウゼンの手で先駆的に導入された英国式庭園と有名な温室を備えていたが<sup>20</sup>、そんな販売攻勢が作中の領主の「庭師」に不信感を抱かせ、出品目録中の「信頼できる〔honette〕名前」のせいで一層、同じ一族のあの法螺吹き男爵を連想させてしまうようだ（383, 460）。この町の寛容な領主はクエーカー教徒にも集会所建設を認め、ゲータは彼らの礼拝を参観したが<sup>21</sup>、作中でもクエーカー出身の科学者ヤングが「建築家」となって自由な礼拝を演出する（438ff.）<sup>22</sup>。眼病用の鉱泉もあるこの町で、彼はさらに「眼病の王侯ザングシュコ」に出会った<sup>23</sup>。エウスタヒオ・サンゲーシコ（1768-1844）は旧ポーランド・リトアニアの貴族で、後にナポレオンを担ぎそのロシア遠征に准将として参加したが、作中でも、盲目のペリサリウスを演じた「幾年かきの男」が勝気なルチアーネに酔わされて彼女の一行を「ポーランド式に」自分の広い領地に招待する（427, 430）。ゲータはこの町で、ある亡命者が指にはめていた小さな彫石にも興味を示した。そこには、彗星の徴をおびたカエサルがブルートゥスやカッシウスと共に描かれていたが<sup>24</sup>、作中でも、「燃える彗星のような」（413）ルチアーネが、ドイツを支配下におさめたナポレオンのように皇帝（カエサル）ごっこを演じる<sup>25</sup>。また、この町での交友関係を機縁として、後にゲータがある幼児の洗礼の代父を頼まれたことは<sup>26</sup>、

<sup>17</sup> Heinrich Düntzer, *Charlotte von Stein*, Stuttgart 1874, Bd. I, 302, 385; Bd. II, 5; クラウス、前掲書、82, 86頁。

<sup>18</sup> 前記拙稿補遺165頁以下を参照。

<sup>19</sup> クラウス、前掲書、69, 163頁を参照。

<sup>20</sup> Hans Joachim Tute, *Schloss Schwöbber: Geschichte und Gegenwart*, Hildesheim 2005, 36, 52f., 74.

<sup>21</sup> FA I-17, 80 (Tag- und Jahres-Hefte 1801).

<sup>22</sup> ヤング自身も1796年にこの町に滞在した (George Peacock, *Life of Thomas Young: M.D., F.R.S.*, London 1855, 96.)。作中の建築家については前記拙稿151頁以下と補遺167頁も参照。

<sup>23</sup> FA I-17, 87 (Tag- und Jahres-Hefte 1801).

<sup>24</sup> *Goethes Werke. Weimarer Ausgabe*, IV-18, Weimar 1895, 83f.

<sup>25</sup> 前記拙稿148頁以下を参照。なお、彼女の「婚約者」はフランス学士院の科学者達というよりもむしろ、彼女の「大おば」（ナポレオン軍 la Grande Armée）と共にエアフルトに来た経理総監ダリュエや博物館総裁ドゥノンを掛け合わせた仮想的な人物とみるべきだろう。ダリュエはホラティウスの仏訳者であり、ドゥノンは「世界一幸福な」（430）若い男の恋をロココ的短編『明日はない』に描いていた。

<sup>26</sup> Ernst Grumach und Renate Grumach (Hg.), *Goethe: Begegnungen und Gespräche*, V, Berlin / New York 1985, 146.

作中のオットーの洗礼 (456f.) と対応する。この町で彼が買った「モスリンとパチスタ」および「ショール」<sup>27</sup>も、作中のオティーリエへの贈り物と合致する (372)。

だが何より重要なのは、城館の少し北方にある炭酸ガスの噴出孔と、西方の山裾にある水を湛えた三つの窪地である。前者は口に、後者は子宮と左右の卵巣に見立てることができよう。作中の沼近くの丘の建物はコーヒーや魚を味わう適地だと大尉が言うが (326)、この窪地近くの集落も、湯治客が散策中に魚やコーヒーを摂るお薦めの休憩地点だった<sup>28</sup>。ゲーテはこの町の炭酸ガスで実験をしたことを後に具体的に述懐する一方、窪地については不明点が多いためか、日記に僅かな言及を残すのみだった (彼の従者の日記には詳細だが不正確な叙述がある)<sup>29</sup>。以前からこの町を知る鉱泉医は、鉱泉医は、窪地の形成要因を火山活動に求める考えに傾いていたが<sup>30</sup>、1800年秋の嵐の夜に、二つの窪地の間の一画が陥没するという珍事が起きた後、次第に火山ではなく地下水や気象の作用が重視されるに至ったようである<sup>31</sup>。作中でオティーリエが丘の建物の立地を決めた後、大尉が丘と水辺を繋ぐ道の工事を進めた時に〈土〉エドゥアルトが虚脱感を覚えた (329) のは、このことにも対応するかもしれない。

ただし、その後エドゥアルトが「オティーリエの誕生日」に、丘の建物の上棟式の後で花火を準備させて沼の土手の陥没を招く時には、シュタイン夫人への連想は途切れる。上棟式の大工達 Zimmerleute は、夫人の鉱泉医ツィーママンとは違って、太陽系に似た「葉と花の環」<sup>32</sup>が多数「傾いて重なりあって」できた銀河系的に「豊かな花環」を、天界の「音楽」にのせて担ぎながら (367)、屋根の飾りを天体の運行に照応させてゆくのだ。

### 3. 湯舟を彩るウェヌスの宴

「オティーリエ誕生の日と年」はエドゥアルトの植樹の日付と一致する。そのことは、植樹と「同日の重要な別の家庭内の出来事」が、「古い日記」(彼の父が「特に田舎で大変几帳面につけていた」という)に見出されたお陰で判明した (367)。植えたのは、父が「城館の大庭園の新たな一部分を造る際に、夏の最中に抜かせた」ポプラとプラタナスの幼木の幹だという (290)。彼と父の関係がクロノスとウラノスの関係に対応することから<sup>33</sup>、父の大庭園を星空 οὐρανός と解するならば、問題の日付は、1807年にゲーテに惚れられた1789年生まれのみンナ・ヘルツリープに<sup>34</sup>、以下のような連想を通じて結びつけられる。

<sup>27</sup> 後に妻となるクリスチアーネ・ザルピウスへの贈り物である。FA II-5, 163, 728.

<sup>28</sup> Menke, op. cit., 1818<sup>1</sup>, 132.

<sup>29</sup> FA I-17, 79; Johann Wolfgang Goethe, *Tagebücher*, III, Stuttgart 2004, 38, 1229, 1231.

<sup>30</sup> Heinrich Matthias Marcard, *Beschreibung von Pyrmont*, Leipzig 1784, I, 176f.

<sup>31</sup> Menke, op. cit., 1818<sup>1</sup>, 161ff.; 1840<sup>2</sup>, 110f., 194.

<sup>32</sup> 彗星の長い楕円軌道の「葉」のつけ根に、惑星軌道の「花」が咲き、衛星の花弁をつけるのだろう。

<sup>33</sup> 前記拙稿補遺167頁参照。

<sup>34</sup> 彼女は前記の登山に同行した女性以上に、オティーリエのモデルと目されてきた。



図1 動脈



図2 静脈

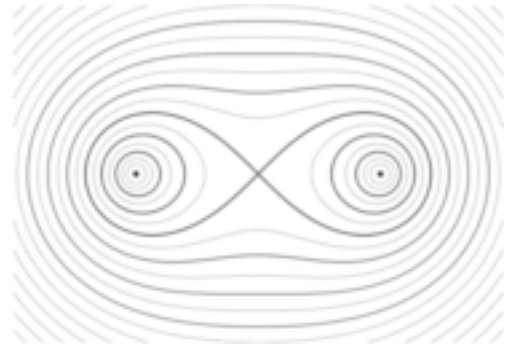


図3 カッシーニの卵形線 (Zorgit による)

1789年は元素ウランの発見年だが、その元素名は新惑星ウラヌスに対応するようにつけられた。後者は英国南西部の温泉町バースの音楽家ハーシェルによって1781年3月13日に発見され、同22日に新彗星として王立協会で報告されたが、同じ星の観測記録（発見日の「別の出来事」）が8月（「夏」）にゲッティンゲンの1756年の恒星目録（「古い日記」）に見つかったから、過去の観測記録が次々発掘されて、彗星や恒星ではなく惑星だと確認されたのだった<sup>35</sup>。その発見 *Entdeckung* とはしかし、神話によれば、大地ガイアに覆いかぶさって性交に耽る星空ウラヌスが子クロノス（サトゥルヌス）に襲われ（交尾 *Deckung* の覆いを剥がされ *ent-deckt*）、鎌で切られた彼の男根がその怒張した血管も露わに水辺に放り出される情景である。その泡立つ精液と血液から天のウェヌス（*Ἀφροδίτη Οὐρανία*）が生まれるわけだが、『百科全書』の挿絵を信用するならば、切られた男根の動脈と静脈はそれぞれプラタナスとポプラの幼木の幹のように見えたはずなのだ（図1, 2）<sup>36</sup>。そしてその星が発見・報告された日付が、聖オティリーエを記念する（12月）13日とミンナの生まれた（5月）22日に対応する。

だから問題は「日と年」なのであり、月ではない。星空の観測を邪魔する月はむしろ、この〈発見〉に続いて（闇夜を切り裂く鎌形の新月のように）始まるべきものであり、ウェヌスの誕生によって月の（ものの）始まり *Menarche* が象徴されるとも考えられる。ウェヌスと月は作中で錯綜した関係にある。プラトンが卑俗な全部族のウェヌス *Ἀφροδίτη Πάνδημος* に母親不在の天のウェヌスを対置したように、母親不詳のオティリーエは、俗世間に金星のように低く輝くルチアーネに月光然として対抗するのだ<sup>37</sup>。この複雑な〈プラトニック・ラヴ〉の実態を

<sup>35</sup> Simon Schaffer, "Uranus and the Establishment of Herschel's Astronomy", in *Journal for the History of Astronomy* 12, 1981, 11-26, pp. 12f.; Johann Friedrich Wurm, *Geschichte des neuen Planeten Uranus*, Gotha 1791, 35; 齊田博『近代天文学の夜明け』誠文堂新光社、1982年、59, 61, 73頁以下。

<sup>36</sup> 両者がこれほど違う形に描かれたのは、描き手が血管系の幹と枝分かれを図示する際に、それぞれプラタナス型とポプラ型の樹木の挿絵に倣ったせいだろう。 *Encyclopédie*, Paris, 1751-72, t. XVIII: *Recueil de Planches*, "Anatomie", Pl. VIII, IX.

<sup>37</sup> 『饗宴』180de。前記拙稿167頁も参照。なお、聖ルチアの記念日も聖オティリーエと同日である。

知るために、まず彼女の誕生日の儀式を分析しよう。

陰格的な丘の建物の上棟式の情景は、ポッティチェリの『ヴィーナス誕生』や『春』と似ている。「小枝や草花」を散りばめた「風」の強い春景色の中で、かつてトスカーナの特産として知られた絹の「布」を飾りとして行われ、「豊かな緑に取り巻かれた」広場で舞踊が始まるからだ(367f.)。ゲーテがフィレンツェで(当時は注目されずにいた)これらの絵を見た可能性は低い、実は上記のモチーフに加えて、花輪、食卓、楽器、建物の軒の飾り縁の間に刻まれた文字など、作中の上棟式と共通するモチーフが、ポッティチェリの同僚パッチョ・バルディーニの作とされる銅版画の金星(ウエヌス)図に描かれており、そこには浴槽で絡まる男女の姿もあった<sup>38</sup>。〈花の都〉フィレンツェのこうした祝祭的図像には北方諸国の惑星図像の伝統との密接な関連もあったことが知られている<sup>39</sup>。版画に精通していたゲーテは、イタリア旅行前の1784年にヴァイマルの宮廷用に『惑星舞踊』<sup>40</sup>を創作した頃から、南北双方のそうした図像伝統を自作に活用するすべを心得ていたのではないか。

ただこの上棟式には、慣習的な図像とは異質な要素もある。例えば、大工達は「通常の装飾用に婦人方から絹の布や帯」を乞い求めた後、祝宴の食事中に「暫く村の中にとどまり、そこでも女たち娘たちから帯の類をねだり取って」から丘の上に現れる。消化器官のように円くうねる「村」の姿(316)からして、ここで想起されるのは何よりも、フィレンツェの天文台スペーコラの中に展示されていた、開腹状態の女性を表す蠟製模型である。この種の医学用蠟細工のことは、ゲーテより十年余り早くフィレンツェを訪れたサド侯爵にも知られていた<sup>41</sup>。だから、縁飾りつきのシーツに横たわる彼女たちの腸のうねりをゲーテがこの町で見たという確証はないにしても<sup>42</sup>、解剖学に詳しい彼が小説執筆時点でその種の反古典主義的な〈メディチ〔医者〕のウエヌス〉の存在を知らずにいたとは考えにくい。また、祝宴と天文台の組み合わせも経験済みだった。彼はピュルモント滞在後、1801年8月28日にゴータの天文台を訪れてから、その日の午餐会で自分の52歳の誕生日を、女装趣味など仮装好きで知られたゴータ公子に祝ってもらったからだ<sup>43</sup>。

ウエヌスを生んだ泡立つ水面の描写も実に科学的である。祝宴の後、「型通りの行列」を嫌う〈空気〉シャルロッテは、液面の表面張力のもとに「一行をある程度押しとどめて」おいたため、精液と共に漂う気泡たちはすぐ弾けて消えるかわりに「順序なくばらばらにまとまって、ゆったりと *gemächlich*」泡沫状に仕切られつつ踊りの場に到着し、オティーリエが「最後に」主賓のように泡の〈光〉沢に輝いたらしいからだ。彼女らがこのように泡沫のもとで精液と絡

<sup>38</sup> 複製写真はグウェンドリン・トロッテン『ウエヌスの子どもたち』ありな書房、2007年、116-117頁のほか、アビ・ヴァールブルク『ヴァールブルク著作集』ありな書房、第2巻、2004年、58-59頁、第3巻、2005年、13、295頁にも載っている。

<sup>39</sup> トロッテンの前掲書を参照。

<sup>40</sup> この舞踊では、新惑星ウラヌスは暫定的にキューベレーと呼ばれている。FA I-5, 453ff.

<sup>41</sup> ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『ヴィーナスを聞く』白水社、2002年、121頁以下。

<sup>42</sup> 石原あえか『科学する詩人ゲーテ』慶応義塾大学出版会、2010年、104頁以下参照。

<sup>43</sup> FA I-17, 88f.; *Tagebücher*, III, 595.

まるウェヌスの姿をさらけ出すのは「よくない」<sup>44</sup>。そこでこの「露骨な」情景を隠すため、「人はそれを緑の小枝と花で、大尉の口出しした通りに建築のように飾り立てた」(368)。精液代わりに浴槽の石鹸水を吹いて、泡の華麗な干渉色で隠し処のイチジクの葉を飾り立てたのではなかろうか<sup>45</sup>。と言うのは、ここで前記の「建築家」ヤング（彼もまたゴータ天文台を訪れたことがある<sup>46</sup>）が次のように介入してくるからだ。

この式典に先立つ章に初登場した彼は、「大尉にかつて導かれた者 Zögling」として沼の堤防工事にあたり、水面を「下方」から引っ張る重力波と「中央部」で均そうとする表面張力波に対処するため、波動研究の「腕ききの親方」（グリマルディやホイヘンス）を援用したり、ラプラスに表面張力の数式処理業務を「請け任せ」たりした（365）。その彼がいま、重力を及ぼす「エドゥアルト〔地球〕の働きかけ」を受けて、「大尉には知らせぬまま」「軒の縁に日付〔Datum〕を花で描き記」そうとするのだ（368）。泡沫の〈建築〉をおりなす液体が下方に落ちるなどして泡の膜の厚さが不均一化し、膜の外面で反射した光と内面で反射した光の波長が干渉し合うと華やかな色が現れるが、彼はここでそのデータを（ヤングの講義録の挿絵のように）軒飾りに似た形で記そうとしたのだ、と解しておきたい<sup>47</sup>。

しかし大尉がじきに「到着」したお陰で、「切妻の壁」に「オティーリエの名前」までが輝くことはなくて済んだという。大尉は、それを我々が凝視する（我々の眉の〈軒下〉の角膜に飾りつける）や否や、涙腺伝いに涙を「巧みに geschickte Weise」送り出し、瞬きを誘発してその輝きを「はね返すこと abzulehnen」によって、角膜の〈切妻壁〉に映った干渉紋様の「花文字を除去」(368) しえたのではないか。ただ、そうは言っても、その花文字は作家の恋する娘の名前 Herzlieb と同じ意味をもっていたはずだ。泡の表面には「原色、高昇色、混合色など色彩図式のすべてが見られる<sup>48</sup>」と言うゲーテは、その光の現象を娘と同じく〈心から愛し〉ていただろうからだ。前記の銅版画のウェヌス図中の家の軒下には“(Om)nia vincit amor”と記されていたのだが、恋に眼の眩んだゲーテもここで、涙ながらに眼を塞ぎつつ、まさにその行為を〈花文字の除去〉という（破瓜 defloration を思わせる）形で記述することによって、彼の言う「根源現象」の諦観と充足感を両立させたのかも知れない<sup>49</sup>。

さてその後、前記の銀河系状の「花環」は天の川として「広く周囲に見える」ように掲げられる。「帯や布が色鮮やかに空中にはためき、短い演説はほとんど風にかき消された」(368)。これは、ラプラスが想像したように、星雲状の原始太陽系が冷えて収縮する過程で、外縁に取

<sup>44</sup> プラトンは、ウラノスの去勢をめぐる出来事をヘシオドスに倣って公然と描くのはよくないと戒めている。『国家』377d-378a。エドガー・ウィント『ルネサンスの異教秘儀』晶文社、1986年、118頁。

<sup>45</sup> ゲーテ自身デュルモントで、シャボン玉を炭酸ガス上で踊らせる実験を披露している（FA I-17, 79）。また、ウェヌス誕生の図像にシャボン玉を組み合わせたような絵は17世紀にも描かれていた。森洋子『シャボン玉の図像学』未来社、1999年、147頁以下を参照。

<sup>46</sup> ヤングはそこで1796年に、後出のツァッハに会った。Peacockの前掲書101頁を参照。

<sup>47</sup> Thomas Young, *A Course of Lectures on Natural Philosophy and the Mechanical Arts*, London 1807, I, 788. (Google Books でカラー挿絵が見られる)。彼の表面張力の理論は“An Essay on the Cohesion of Fluids”, *Philosophical Transactions* 95, 1805, 65-87. に初出。

<sup>48</sup> 『色彩論』教示篇466節（FA I-23-1, 166）。

<sup>49</sup> 「私が最後に根源現象のもとで安堵をおぼえても、それはやはり諦観でしかない。」箴言第577番（FA I-13, 49）。



り残された流体（太陽霧団気）の帯が凝結して惑星が生まれてくる情景だろう<sup>50</sup>。ニュートンが解かずに残した、三体問題に由来する惑星・衛星・彗星の不規則な摂動を、ラプラス Laplace が近似的に解いて太陽系の安定性を示したお陰で<sup>51</sup>、「平らに均され、葉で縁を囲まれた広場 Platze で」惑星と衛星の踊りが始まる。そこに現れた「着飾った大工職人」は、星空装飾 κόσμος の専門家として天文台の建設や改良にまで携わった天文学者 J.D. カッシーニに違いない。なぜなら彼は、エドゥアルトの所に「動きの目立つ百姓娘を連れてきて、自分はそばにいたオティーリエを踊りに誘った」からだ。1671年にカッシーニが発見した土星の衛星（ゲーテの没後にイアペトゥスと命名された）は、その〈顔面〉（進行方向側の半球）が日焼けしたように暗い点で、この百姓娘と同様に目立っていたのである。また誘われたオティーリエの方は、カッシーニの研究した月の秤動を、その顔の動きで示したと考えられる<sup>52</sup>。若い客（流星等）が踊りに加わり、年寄り（恒星）が動かず見物する中で、エドゥアルトは無論〈土〉星たることに飽き足らず「すぐ相手を変え、オティーリエを捉えて輪舞した」（368）。こうして〈地球〉に捉えられた〈月〉は初め（別のペアの流儀で）独立に自転していたはずだが、じきに（カントが指摘した潮汐摩擦のせいで）自分の自転周期を（地球の周りを回る）公転に同期させ、（思わせぶりに秤動しながらも）常に地球と同じ〈顔〉を向ける形で回るようになるのだ。

太陽ではなく〈地球〉や地上の観測者を中心にして描かれるこの踊りの情景は、カッシーニの卵形線（図3）をも連想させる。ケプラー・ニュートン流の楕円軌道説を支持しなかったカッシーニは、楕円（2定点からの距離の和が一定であるような点の軌跡）に代えて、2定点からの距離の積が一定となるような点の軌跡を考えた。定点のうちの一つを地球としたときに、太陽の軌跡はそうなるのではないかというのである<sup>53</sup>。図3の中央を座標原点、距離の積を $a^2$ 、2定点の座標を $(-b, 0)$  および  $(b, 0)$  とすれば、その動点  $(x, y)$  の軌跡は

$$(x^2 + y^2)^2 - 2b^2(x^2 - y^2) = a^4 - b^4$$

の四次曲線になる。 $a < b$  のとき、曲線は二つの卵型を描くが、 $a = b$  では8の字型のレムニスケート曲線をなす。 $a$  が  $b$  より大きくなるにつれて8のくびれが減り、楕円に近い形へと膨らんでいく。式辞をかき消す風の中に「帯や布」（368）がはためいた時、8の字曲線が文字どおり〈帯で飾られた lemniscate〉形で垣間見えたのではなかろうか。『ヴィルヘルム・マイスター』のミニョンの卵踊りが<sup>54</sup>、卵巣や睾丸へと固定されがたい性的ゆらぎを連想させるのに対し、この上棟式の踊りは男たちの欲望をなぞる形で、左右の卵巣を呑み込む臨月の子宮の膨らみを卵形線で暗示していると考えられることも可能ではないか（ニュートンは、あの礎石を封印した若

<sup>50</sup> Pierre-Simon Laplace, *Exposition du système du monde*, Paris 1808, 391f.

<sup>51</sup> カントの星雲説が太陽系の滅亡を想定したのに対して、ラプラスは惑星の乱れた摂動に規則性を見出した点で、天界の〈現象を救う〉プラトニズムに貢献したといえる。

<sup>52</sup> 月の自転軸は傾いており、月の公転軌道も完全な円形ではないので、地球からみるとゆっくり首を振っているかに見える。

<sup>53</sup> Jean Cassini, *Eléments d'astronomie*, Paris 1740, 149. この卵形線は『百科全書』の「楕円」の項にも解説されている。図3において、内側の太い曲線から順に  $a/b = 0.6, 0.8, 1.0, 1.2, 1.4, 1.6$  の場合を表す。グラフは Zorgit ([http://en.wikipedia.org/wiki/File:Line\\_of\\_Cassini.svg](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Line_of_Cassini.svg)) による。

<sup>54</sup> FA I-9, 468f.

い左官 der junge Gesell (333) のように独身者 Junggeselle であり続けたが、カッシーニはパリ天文台を支配する天文学者の家系を築いたのだった)。

ゲーテのオティーリエ像が天界への愛の投影であることは、実はさきの定礎式の翌日にすでに暗示されていた。そこに「伯爵」同伴で現れた「男爵夫人」のモデルは、前夫アントワースの下で〈フロギストン火刑劇〉の巫女を演じた後、物理学者ラムフォード伯爵と結婚したマリー・アンヌ・ラヴワジエだ<sup>55</sup>。田舎臭いオティーリエ（錬金術的なフロギストンの〈火〉）を「都会の女友達」（化学界）の手で再教育したい（346）という彼女の科学的熱意を、ゲーテは嫉妬の表現と捉える。呼吸や発酵を生化学的に研究し、錬金術師の夢みた発酵・生殖の概念を粉砕することで、子を産めぬ自分の悔しさを晴らそうという「毀傷の喜び」（347）である。そんな「悪意ある」男爵夫人が子宮的な沼の端でエドゥアルトに葡萄摘みの計画を持ちかけると、彼は葡萄の発酵から短絡的に連想を広げたらしく、有頂天でオティーリエに近寄って『受胎告知』中の天使のように「花束」を捧げてしまう（347）。こうして錯覚された天上的懐妊のイメージを、ギリシア風に「全く違った雰囲気」（348）に演出するのがその晩の饗宴である。液体の対流に関心を抱く伯爵は、ガラス容器中の酒精を「哲学的」に観察するため<sup>56</sup>、宴席でソクラテス風に「分別をもって謙虚に」（348）<sup>57</sup>大尉の真意を探る。「男爵夫人」マリー・アンヌは、亡夫ラヴワジエの実験中と同様に「伯爵の右側に着席」するが<sup>58</sup>、伯爵の実験には参加させてもらえず、巫女ディオティマ風に一座の中で浮いたままシャルロットの「内なる動揺」を観察することになる。〈空気〉シャルロットは、日光で温められた酒精入りガラス容器の周囲で動揺している。エドゥアルトは容器の中の塵粒として、酒精に溺れて「興奮」し、日〈光〉オティーリエとガラスの「窓際」で活発に「冗談を言って scherzte」酒精のスケルツォの対流運動を可視化する。〈空気〉はそのガラス製広間の「反対側」を往来して熱を冷やし一座を興ざめさせる。男爵夫人は天上のウェヌスを求める風でもなく〈空気〉と彷徨する（348）。やがて第二部でルチアーネが登場すると、男爵夫人はその卑俗なウェヌスの振舞いを黙認し、オティーリエの方を片づけようと再び画策する（449）。マリア懐胎を錯覚させた上でウェヌス下降に加勢する、聖アンナもどきの似非〈新プラトン主義〉の巫女として描かれていると言えよう。

<sup>55</sup> 前記拙稿149頁以下を参照。伯爵の前妻の死亡証明書を米国から取り寄せるまで二人は結婚できずにいた。

<sup>56</sup> Benjamin Count of Rumford, *Essays, Political, Economical and Philosophical*, London 1798, II, 200, 205f. 独語版は Count Rumford, „Versuche und Beobachtungen über die Fortpflanzung der Wärme in Flüssigkeiten“, in: *Neues Journal der Physik* IV, 1797, 418-450.

<sup>57</sup> プラトンの『饗宴』にいう σωφροσύνη (209a, 216d, 219d) の真似事であろう。北米植民地出身のスパイから成り上がったラムフォード伯爵の経歴は、プラトンの向こうを張って別個に『饗宴』を書いたクセノフォンに似ている。なお、彼は英国の王立研究所に電気化学者デーヴィを雇い入れたことでも知られるので、作中でも晩餐に先立って、大尉の就職問題（〈水〉が酸素と水素に電気分解されること）を示唆して〈空気〉シャルロットを「心底から引き裂」き、呼吸化学的に「涙」（水を生成）させている（345f.）。

<sup>58</sup> 前記拙稿（150頁）で示唆したように、ラヴワジエ呼吸実験の挿絵（図の右側にマリーが座っている）の構図をゲーテが伝え聞いていた可能性は高い。作中の饗宴は、大尉と語る伯爵が熱運動説、シャルロットを追う「男爵夫人」がラヴワジエ流の熱素説、エドゥアルトとオティーリエがフロギストン説をそれぞれ志向する形ですれ違いに終わる。

## 4. 夜空にはえる果樹と「アスター」

エドゥアルトは1753年生まれラムフォード「伯爵」より少し若い(336)、彼の「誕生日」(384, 408, 517)は作中で一度も祝われない。これは、教会が地動説書籍の一律発禁を1758年に解除したのに、〈地球〉がガイア中心の天動説 Geozentrik から解放=分娩されたことを依然公認していなかった<sup>59</sup>せいだろう。地動説の主要な論拠となるべき恒星の年周視差(地球が公転軌道上を数億 km 移動するため恒星の位置が僅かにずれて見えること)を測れる器械も当時まだなかった。エドゥアルトの老いた良き「庭師」が、〈光〉オティリーエと違って主君の誕生日に無頓着なのは、そんな事情を考えれば理解できる。育てた「芽」や「枝」をルチアーネに摘まれて悩む(423)彼の姿は、フランスに対抗しながら自分の植物園や植民地の拡充に努めた英国王ジョージ三世を想起させるが<sup>60</sup>、王はまた天文観測の支援にも努める一方で、何度か知的障碍を患っていた。そのせいか、庭師は初めに、地動説への賛否を曖昧にしたデカルト流に、古めかしい園芸観を披露するはめにさえなるのである。

地面に楕円を描くには、二点に杭を打った後、一本の紐で輪を作って両方の杭に引っ掛け、その紐をぴんと張ったままの状態に杭の周りを回ればよい。デカルトは『屈折光学』で、レンズ製作用にこの「庭師」の作図法を紹介したほか、目に入る光を「杖」になぞらえもした<sup>61</sup>。盲人が杖先の物の圧迫を一瞬で知ると同様に、星などの光も一瞬で眼に伝わるというのだ(彼は光学と園芸の連想をさらに発展させて、光線の作用を醸造桶の中のワインの流れに喩えてもいる<sup>62</sup>)。同様に『親和力』の庭園小宇宙でも、隼丸のような「苗木場」(271)がその楕円形ゆえに、接眼レンズ Okular を用いた光線の芽接ぎ Okulation の天文学的模型にされていると解しうる。ただ、そこで接木に取り組むエドゥアルトは、デカルトが深入りしなかった光速の有限性の問題に直面する。〈地球〉は自分の公転と共に秒速30kmで楕円軌道上を伸び進む望遠鏡の「若い樹幹」へ、秒速30万kmで「新鮮に」入射する星の光を接木せねばならないのだ。この公転速度と光速の関係から生ずる恒星の年周光行差<sup>63</sup>が、1728年に発見されて地動説書籍の発禁解除を促すに至ったのだが、庭師はその事態を真に受ける様子もなく、疾走する主君の「協力的な勤勉さ」を見て「面白かった」。「四月の午後」(271)の情景であるから、(英国流に4月1日正午以降の嘘を嘲って)主君の四月馬鹿を笑った<sup>64</sup>のかもしれない。

<sup>59</sup> アンニバレ・ファントリ『ガリレオ』みすず書房、2010年、497頁以下、521頁以下。

<sup>60</sup> 英国に支援された仏王党派は、ふくろう党員カルボン Carbon に爆弾を作らせ1800年12月24日にナポレオンを襲撃した。作中のオティリーエも温室で静かに(炭素 carbon のような熱意で?)庭師に助力するが、「真冬」にそれを知ったルチアーネは、襲われたナポレオン同様、過去の「花」月、「実」月や「緑」の草月のクーデタ関係者を一掃して左右両翼の謀反の芽を摘みたがったらしい(423)。また、ナポレオンは1804年3月にアンギャン公を処刑してブルボン家の〈枝〉を切った時、国際法に違反して、公を捕えるための部隊を中立国パーデンに数マイル侵入させたが、ルチアーネも同様に近所「5マイル」を荒らし回る(423)。

<sup>61</sup> デカルト『著作集』第1巻、白水社、1993年、170頁と115頁(第8講と第1講)。

<sup>62</sup> 同前、116頁以下。前節でみたように葡萄摘みの情景が『受胎告知』の光線と連想される(347)のは、フランス科学のデカルトの伝統を意識した挿話だとも考えられる。

<sup>63</sup> 恒星の光の入射角度が、地球の公転運動のせいであられること。走行中の車両に雨が前方から降りつけるのと同じ原理であり、恒星の年周視差よりもずれが大きい。

<sup>64</sup> Cf. James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Edinburgh, 1908, Vol. 1, 332.

後にオティーリエがナニーと一緒に草花の世話をし（〈光〉が望遠レンズ<sup>65</sup>の収差で色分けされ）、公転するエドゥアルトの「帰還」（までに生ずる恒星の年周視差）を密かに想像しつつ、「春の接ぎ穂」が育ったのを喜んだ時にも、庭師は逆に「城館の古いお庭に先代様の頃から残る」品種を偏愛する（383）。恐らく、星表『ウラノメトリア』（1603年）中のバイエル符号つき恒星のことだ。彼は、その星表の基礎データを提供したウラニボルクの城主ティコ・ブラーエに倣って、コペルニクス説を年周視差もろとも否定したかったのではなかろうか。なぜなら彼にとって、グリニッジ原産の『天球図譜』（1729年）のフラムスティード番号や、その半世紀後パリのクリュニ館の私設小天文台で作られたメシエ天体（星雲・星団・銀河）の番号など、「今の果樹作りのお歴々」の品種は<sup>66</sup>、以前パリ天文台の隣にあった「カルトゥジア会」修道院の農産品ほども「信頼できない」ようだからだ（383）。

エドゥアルトの帰還予定の日時（年周視差の角度の分秒など）を〈光〉オティーリエに教えてもらえぬ彼は、「誠実な〔honette〕名前」で知られるグラハム（通称 Honest George Graham）やラムズデン（Honest Jesse）の観測器械の成果を信用したくないらしく、「自分の手仕事」に頼る。彼の問いに彼女が苦悶しつつ耳を傾ける傍らで、彼女につきまとう低能児ナニーが庭の「摘み遅れた苺と桜桃」を頬ばり噛み砕く<sup>67</sup>。波打つ入射〈光〉がこうして〈レンズ〉の円い口で折り曲げられ、その周囲を長波長の赤や短波長の重色で汚すため、彼女は色収差の「縁取り花壇から離れられなかった」（383）。光行差と色収差で分秒のずれた「遅咲きの花」が、恋人の「誕生祝い」（年周視差の測定）を彼女の「傾倒」姿勢と「感謝」の屈折で虚飾しそうなのは厄介な問題である（383f.）。だがそれに加えて、鯨飲（380）する壮年の恋人の言わずもがなの肥満体や、〈大気〉シャルロtteとの間で生じる波紋のせいで、「疑念と心配」が彼女の「周囲から囁きかけ」もする（384）。すなわち、〈地球〉は赤道胴囲が南北の子午線長以上に膨れており、また引き締まった剛体でもないため、その自転軸が太陽や月の引力によって歳差と天文章動の揺れを起こす上に、地軸の傾きゆえの自由章動や海流・大気循環等による計算困難な極運動でもふらついてしまう。だからそこに入射する〈光〉は、疑わしい外力の遠隔作用や恋人自身の乱心に気を取られて、誕生を祝える見込みが霞んでしまうのだ。

教会権力にうちかつ武器となるべき年周視差は、恒星から地球までの「無限の空虚」のせいで測定限界以下だったが、恋を「諦めない」彼女は、夜な夜な観測機器の筒内に「閉じこもり」、観測者の眼球状に「開いた鞆」<sup>68</sup>の前に「膝を屈めて」みせた（384）。彼女は特になりゅう座 $\gamma$ 星

<sup>65</sup> 前記拙稿147頁で、ナニーを視力矯正用レンズと性急に同一視したのは誤りだった。

<sup>66</sup> 普通名詞 messier は作物の番人を意味するので、メシエ天体は〈果実〉と見なせる。一方、『天球図譜』刊行前に没したフラムスティードは、作中では日夜マイペースで働く病気がちな「書記」として周囲を苛立たせ、彼の未完の書き物を時辰儀好きの大尉とオティーリエが奪い合う（297, 321, 336）。相争う両者（時辰儀経度航法と月距航法）の精度を自ら確かめようとしたジョージ三世の態度が、エドゥアルトの帰還日時（日々回転する地球の経度）を頻りに尋ねてオティーリエを困らす庭師の姿に反映されているとも解釈できよう。

<sup>67</sup> ゲーテの息子アウグスト（ミンナと同年に生まれ、誕生日はニュートンと同じ）もピュルモントで苺と桜桃を食べた。1801年6月25日のクリスチアーネ宛書簡を参照（FA II-5, 163）。

<sup>68</sup> この「鞆」の中身は、前記拙稿153頁で示したように、眼球に備わる遠近調節作用 Akkommodation である。その中身がここで「未使用」状態だった（384）のは、正視眼の観測者ならば調節作用を特に働かせずに天空の無限遠点（正視の遠点）を凝視できるからだろう。なお、拙稿補遺167頁ではその鞆に抽斗つきの戸棚 Kommode が属しているかのように書いたが、後者は作中では一応、鞆とは独立の家具として描かれている（518）。

(ロンドンの天頂を通るので観測しやすかった) から、年周視差発見を狙うブラッドリとグラハムの天頂儀越しに何年も見つめあった。ブラッドリは、天空のヘスペリデスの果樹園を見環るその竜の光が予想外の(年周視差に帰することができない)位置変化を示したため戸惑ったが、ある日テムズ川で舟遊び中に、はためく舟旗の角度が舟の進行方向と速度次第で変化することを船頭達から教わったお陰で、光行差の作用に気づいたという<sup>69</sup>。オティーリエが「舟」の上で「旅の記録を取り出し、揺れ動く波に身を任せ、読み、遠くを夢見てはそこに親しい人の姿を見出した」(384f.)のはまさにその時だろう。観測を続けたブラッドリは年周視差こそ見つけ損ねたが、この光行差(1728年)に加えて地軸の18.6年周期の天文章動(1747年)も発見できた。後者が月の引力の作用であることはやがてダランベールの計算で示された。お陰で、(潮汐のせいでは月とは徐々に遠ざかるとは言え)旅路に揺れる〈地球〉の「心」と星月夜の〈光〉との間に「いまなお近しい」関係があることがわかった(385)。

〈光〉オティーリエはまた「建築家」ヤングを手伝って、頭蓋の「礼拝堂」に「天地を繋ぐ」ように花や果実を吊るした(407)が、建築家が最後に七日間の窓の色合わせ作業を終えて安息日を迎えたとおぼしき時刻には、彼女は間近に迫った恋人の誕生日を「違った風に」祝いたかったと思う(408)。吊るされた眼の林檎(眼球 Augapfel)とアイリス(虹彩)は、1801年11月に口頭発表されたヤングの色覚理論や<sup>70</sup>〈土星〉の農耕神サトゥルヌスよりも、むしろ豊穡な〈土〉の女神ケレスのための受光器だったのではないか<sup>71</sup>。というのも、出征した恋人については一旦武勲が報じられた後また消息が絶えていたのだが(406)、それと同様に1801年の天文学界は、年頭にパレルモ天文台で発見されたあと(太陽に近づいて)見失われた、新たな第八(準)惑星ケレスの追跡に奔走していたからだ。発見者がナポリ・シチリア王フェルディナンド4世を讃えてケレス・フェルディナンディアと名づけたその小天体が、年末に首尾よく再発見された後、数年間に三個の小惑星 asteroid が同じように火星と木星の軌道間に発見される。発見をなしとげたりリエントール天文台には日中観測も可能な大望遠鏡があったが<sup>72</sup>、その〈百合の谷 Lilienthal〉並みに、作中の庭でも大輪の「向日葵が顔を天に向けつづける一方、アスター〔Astern〕が静かに慎ましく前を見据えていた」(408)。また、太陽と各惑星の間の距離はある簡単な数列で表されるという説が以前からあったが、その数列の内外に残っていた二つの空所(火星・木星間と土星の外側)を、ケレスら群小惑星とウラヌスがそれぞれ都合よく埋めてくれたため、前者の小惑星帯についてある憶測が広まっていた。発見された小天体群は、ある破壊された惑星の残骸ではないかというのだ<sup>73</sup>。だから語り手は言う。「どうにか摘まれて花環

<sup>69</sup> *Encyclopaedia Britannica*, Edinburgh 1797, Vol. 17, "Seamanship", 198-221. の204頁と Vol. 15, "Precession", 455-468. の457頁を参照。

<sup>70</sup> Thomas Young, "On the Theory of Light and Colours", *Philosophical Transactions* 92, 1802, 12-48. 同号213-232頁にはケレス等小天体についてのハーシェルの論考が載っている。

<sup>71</sup> この花と果実を鼻腔の構造に関係づける解釈(前記拙稿152頁)は少々迂遠であった。

<sup>72</sup> 小惑星が日光に隠れて見えないことは、『遍歴時代』中でも言及される。FA I-10, 761.

<sup>73</sup> ゲーテは1809年の仮面舞踏会用台本や1825年の「気象学の試み」の中で、この想像上の惑星に言及しているが、残骸説を支持する態度はみせない。FA I-6, 812; I-25, 299.

に編まれた花々は、ある場所を飾るための見本にされていたが、そこは、もし単なる芸術家の酔狂に終わらずに何かの用に供されるとしたら、共同墓所にしか適さぬようにみえた」と。オティーリエはそんな数列信仰に煽られたかのように、あの自分自身の誕生日に催された星界誕生の輪舞や爆発的な「花火」のことを想起せずにはいられなかった(408f.)。

彼女はその後、ルチアーネに温室を荒らされながらも春の訪れを喜ぶことができた。それは、英国で製品化された色消しレンズが「ガラス室」のように、その「背後」に控えた眼に外界の光の花を「定時に」(屈折角度の分秒を色別にずらさず)咲かせた(459)からではないか。庭師の方は彼女と違って、ルチアーネが園内の「幾つかの樹冠の対称性を破壊」して(459)、スペイン・ブルボン家のナポリ・シチリア王国の東半分を奪った上に、ジョージ三世の英国・ハノーファーの同君連合まで分断したせい<sup>74</sup>、落胆したままだった。デカルト光学の盲人の杖にすぎるように「手仕事」の感触 Gefühl と手応え Begriff に頼る庭師は、「植物は頑固な人間と同じで、その性質に逆らわずに扱えばこちらの思い通りになる」ことをよく心得て〈光〉と協力してきた(459f.)。だから、ガラス温室を眼球同様の受光装置として扱い慣れてはいたが、おなじみのハーシェル反射望遠鏡よりも小型の色消しの屈折望遠鏡には「新種の観賞用樹木」同様に親しめぬらしく<sup>75</sup>、続出する新天体の「聞き慣れぬ名前」にも戸惑う。色消しレンズの開発・特許競争に耽る「園芸商人」のせい草花が「色あせる ausgehen」ことも彼には不満だったようだ。それでも、彼が立てた「ある種の計画」にオティーリエが助力して、「エドゥアルトの帰還」(460)に伴う星空の年周運動を待ち構える体制はできていた。というのは、ジョージ三世に支援を受けていたリリエントール天文台のスタッフが1800年秋にゴータ天文台長ツァッハらと組んで、火星・木星間に想定されていた惑星などを探す国際掃天体制を作ったからだ<sup>76</sup>。前記の小惑星発見もその成果の一部だった。

オティーリエの方はさらに、眠る幼いオットーに「乳と水」を与えて、閉じた眼球を瞼の皮脂腺と房水で養いながら、伝播=繁殖 fortpflanzen する光の「草花」のもとに連れ出し、彼が目覚めれば「目を向けたものの殆んど全てが彼のものになる」ことを想う。盲点を除く眼球の全網膜上に「アスター」が開花して「地上に星空の形をなす」ことさえ叶うならば、自分の恋は諦めてもよいというのだ(461f.)。実際、それが咲き乱れてから(517f.)進められた「エドゥアルトの誕生日」の準備(519)は皮肉な結果に終わる。地上に〈石灰土〉として現れる彼を待っていたのは、〈水銀〉ミットラーの灰化(煨焼 calcination)という意味での〈石灰 calx の誕生 nation〉でしかなく、そこから発見された酸素という新元素が、フロギストンの〈火〉と

<sup>74</sup> 新たにナポリ王に封されたナポレオンの義弟ミュラは、その経歴と伊達男ぶりから、ルチアーネに「小間物屋のMさん」(417)と揶揄されているようだ。ゲッティンゲンやリリエントールを含むハノーファー選帝侯国は、ナポレオンの弟が君臨するウェストファリア王国に編入された。小さな伯領だったピュルモンはライン同盟に加わり、辛くも消滅を免れた。

<sup>75</sup> 彼が扱い慣れていた「温室」「球根」「撫子 Nelken」「桜草 Aurikeln」(460)は、その形状と語源から、それぞれ眼の硝子体、水晶体、爪、耳に呼応するものと解しておく。「観賞用 [= 装飾] 樹木 Zierbäume」は、装飾 = 星空 κόσμος 用の鏡筒と解しておく。

<sup>76</sup> Lettie S. Multhauf, "Olbers" and "Schröter", in: *Dictionary of Scientific Biography*, 1981, X, 197-199; XII, 226. (この二人の観測家は共にゲッティンゲン大学卒業生である。)

して庭園植物と一心同体生きてきたつもりのオティーリエを、時代遅れの虚妄として葬ってしまう<sup>77</sup>。さらに、白内障患者の眼球をアスターのように輝かせる電気火花とともに、地上の〈ウエヌス〉の凌辱的な昇天劇が演じられた(523ff.)後、エドゥアルトがアルカリ〈土〉類金属のカルシウムとして分解される(528)<sup>78</sup>。天上の小惑星狩りを凌ぐ〈電光石火〉の勢いで、地上でも自然の分析的操作が進められたのである。

## 5. 「舟」の変態と眼の関係 —— 残された問い

子宮のように広がる作中の沼は前記のように、堤防用の波動力学や天文学者の舟遊びの舞台となった。だが、その舟の役割は多様である。舟の試乗日にシャルロッテを浮き浮きさせた(354)訪問客は、1783年にセーヌ河畔などで気球開発の成果を競い合った物理学者シャルルやモンゴルフィエ兄弟とみられる。製紙業者だった後者(兄)は、英国のワットの仲間達と交流しながら英国のホワイトハースト発明の振動ポンプを水撃ポンプへと改良した(1796年)ことでも知られるので、試乗日の出来事は次のように解せよう。

エドゥアルトは、客の製品と「蠟燭」で作った撥水紙に文書を挟んでオティーリエと「照合」(圧写)するのだが(355)<sup>79</sup>、その前には沼の端で、一本の櫂(水素)をもつ大尉にもう一本の櫂(砂囊)を渡して(355)シャルルの水素気球を操縦させた。上昇して窮屈になった球内で「静かに苦しんだ」シャルロッテは低圧の外気へ脱出して、そこから、熱気球上で燃やされる「蘆のそよぎ」を聴いたり、「最後の鳥の飛翔」を見納めたあと高空で二度目の日没<sup>80</sup>と「二度目の星の瞬き」を目にしたりする(356f.)。続いて大尉が、「舟」のように水を押しつける振動ポンプに関して、その「二本の櫂」(排水・揚水弁)の操作は手動ではなく〈空気〉の自動作用に委ねられうると言う、彼女は城 Schloss へ帰ろうと口を開き、「暗い」ポンプ内の排水弁 Verschluss (図4の④)へ彼を誘導する(①→②)<sup>81</sup>。彼の勢いに押されたその弁の口が、不安 Ängstlichkeit げな〈空気〉の声と共に狭く eng になって閉まると、管外へ降りられなくなった大尉は揚水弁⑤を超えて「座礁し」、「浅い」水中に「上がり」③へ揚水を行う。彼がそうやって「愛しい重荷をうまく反対側に渡せた」のは、調圧容器⑥内で彼の「首」にすぎる〈空気〉をギュッと「押し抱いた」反動で、揚水弁を閉じることができたからである。彼が彼女を降ろした(容器圧で押し戻され揚水弁を閉じた)のは「芝生の斜面の上」だった(ポンプ下部の排水弁は、山 mont のゴルフ場を思わせるモンゴルフィエ Montgolfier 式に改良されていた)。お陰

<sup>77</sup> 前記拙稿補遺166頁。植物は燃えてフロギストンを放出すると考えられていた。

<sup>78</sup> 前記拙稿145頁、補遺166頁。彼を検死した「医師」は、カルシウムの発見者デーヴィヤ彼に助言したベルセリウスのほか、追試をした各国の化学者たちの姿と重なり合うだろう。

<sup>79</sup> オティーリエの筆跡はワットの圧写器の性能を示している。前記拙稿148頁参照。

<sup>80</sup> Barthélemy Faujas De Saint-Fond, *Des ballons aérostatiques*, Lausanne, 1784, 252.

<sup>81</sup> 挿絵は Gutza ([http://en.wikipedia.org/wiki/File:Hydraulic\\_Ram.gif](http://en.wikipedia.org/wiki/File:Hydraulic_Ram.gif))による。なお、自動的な圧力調節で水力を操るこの〈浮気〉と違って、夫と寝る時の彼女は、ラムフォード伯の指示に従って、オティーリエの〈火〉力で沸騰した大尉の蒸気(Luftgestalt)で活動しているらしい(352f.)。だが、そこに現れる椅子(Sofa, Sessel)類は何を表すのか。解明が待たれる。

で、揚水弁が閉まると「動揺し混乱し」た逆流の負圧で排水弁が自動的に再び開き、大尉は〈空気〉に「接吻」(②)して平伏し、同サイクルの反復を打診できた(357f.)。

一方、オティーリエの誕生日の夜に舟が運ぶ花火は恐らく、男が視神経の刺激から勃起と射精に至る過程を図解しているが(369ff.)、その描写は、眼球中心窩・脳液・神経・筋肉をめぐる解剖学者の知見や思弁(ハラー・ガルヴァーニ・ゼンメリング等)に作家個人の経験をも加えて構成されている可能性があり、完全解明は難しそうだ。また、オットーの水難事故の情景も錯綜している。そこで丘の上に輝く「新しい家」の「赤煉瓦」(490)は、胎児の解剖図で有名なハンター Hunter 兄弟がロンドンのソーホー地区に1768年に開いた解剖学劇場の外壁の色と一致するので、湖岸に響く「猟師」の銃声(492f.)と舟の転覆は妊婦の悲運と流産を連想させる。だが前稿でも触れたように、転覆の情景(舟、櫂、本、腕、星々)はヘンリーの気体溶解実験の挿絵(図5)に酷似しているので、銃声の比喩は、気体の圧力と溶解量の比例関係(ヘンリーの法則)を弾丸の類比で説明したドルトンの原子観をも暗示すると見てよい<sup>82</sup>。なお、夕日の色彩が錬金術に対する風刺であると前稿では推測したが<sup>83</sup>、そこにはむしろ、眼球の解剖学的処理(標本の着色など)を読みこむ方がよいように思える。なぜなら、オットーの死体を拭いてくるむためのモスリンとショール(494)は、初め前記の眼球状「鞆」に入っていたからだ(372f.)。そこから後続の、通夜めいた(爆発の危険を避けて慎重に行われる)笑気ガス実験らしきものへ至る過程を解読するためには、水難救助に関与する医師達(370, 372, 495f.)がそれぞれ誰を表すのか特定する必要があるだろう。作者が絶えず描写の目先を変えるせいで、内容上〈整合的〉に構成されたはずの情景がポリフォニックな趣きを帯びてわれわれ読者に難解に見えるのだと思われるが、近い将来、湖面の情景に眼差しががどう向き合っているのか解明されるものと期待したい。

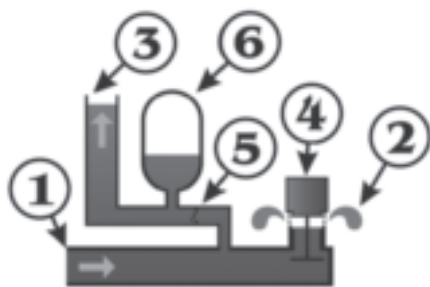


図4 水撃ポンプの概念図(Gutzaによる)

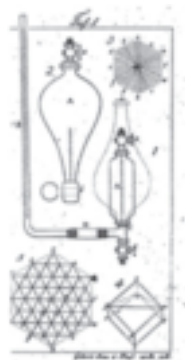


図5 ヘンリーの実験装置

<sup>82</sup> William Henry, „Versuche über die Gasmengen, welche das Wasser nach Verschiedenheit der Temperatur und nach Verschiedenheit des Drucks absorbirt“, *Annalen der Physik* 20, 1805, 147-167. 図中の1は、舟(点線Aの容器 vessel)に乗って櫂(実線Aの小容器)と本(目盛付きガラス管B)を持ち左腕(ゴムの継目D)を振るオティーリエと解せる。2の容器A中のオットー(水)は彼女の〈腕〉から離れている。3や5の〈星々〉は、同巻所収の別の鉱物学論文の星彩石の挿絵。弾丸の比喩は John Dalton, „Über die Absorption der Gasarten durch Wasser und andere tropfbare Flüssigkeiten“, *Annalen der Physik* 28, 1808, 397-416. の409頁を参照。

<sup>83</sup> 前記拙稿168頁。



---

◇

## Astronomy and Geoscience in the Landscape Gardening of Goethe's *Elective Affinities*

Takaoki MATSUI

Goethe used the landscapes of two spas as the background of his story: the Egerland where he visited a volcano with Sylvie von Ziegesal, and Bad Pyrmont where Charlotte von Stein had stayed for convalescence. As the latter's birthday coincides with that of Newton, a Newton-like "mason" celebrates "Charlotte's birthday". The ceremony on "Otilie's birthday" caricatures the *Birth of Venus* with allusions to the contemporary anatomy, to the physics of foam (Young) and to the astronomy of Cassini and Laplace; its unspecified date suggests a combination of the dates of the discoveries of Uranus and uranium with those of St. Odile's feast day and of Minna Herzlieb's birthday. Otilie is thus opposed to "Luciane" as *Aphrodite Urania* to *Aphrodite Pandemos* in a quasi-Platonic manner. "Eduard's birthday" is not celebrated, for it would imply the *delivery* of the Earth (= Eduard) from the Catholic geocentrism. Eduard's "gardener" is confronted with Otilie's unreliable floriculture (parallax and aberration of light) and with the unfamiliar new stellar "catalogs"; like George III who supported Hanoverian astronomers, he is bothered also with Luciane's Napoleonic vandalism while expecting the florescence of aster(oid)s. The "boat" on the womblike lake undergoes quasi-embryonic metamorphoses from balloons and hydraulic pumps to the vessel for dissolution experiments.